



文化財通信くまもと

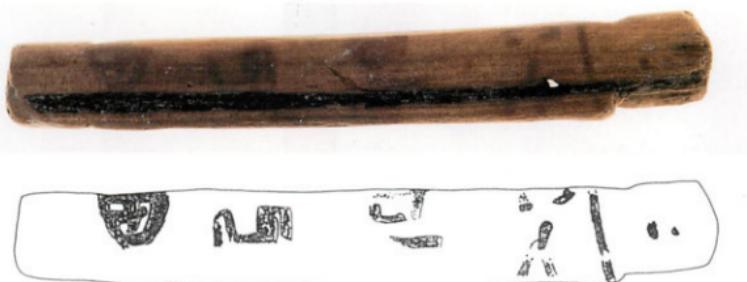
第14号

平成10年3月

熊本県教育委員会
(文化課)



(熊本市並尾古墳石室石扉形前壁装飾)



玉名市柳町遺跡出土木製短甲棒状留め具文字資料

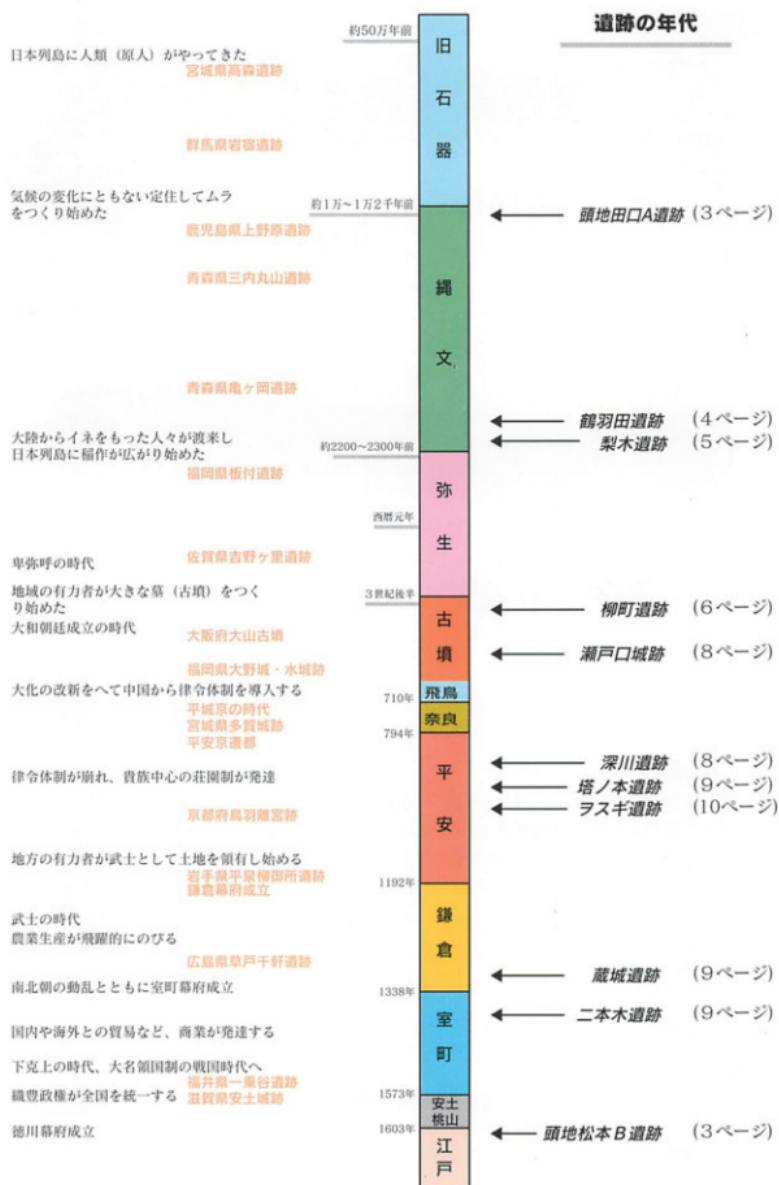
はじめに

『文化財通信くまもと』第14号は、平成8年度から平成9年度にかけて実施された熊本県文化課及び文化課が支援をおこなった市町村の埋蔵文化財発掘調査について遺跡のあらましや特に大切な成果を取りまとめたものです。今後、本格的な報告書が刊行される予定ですが、それまでにはかなりの時間が必要です。今回の小冊子はその速報としてお使いください。

なお、発掘調査は文化財保護法により、建設省、日本道路公団、鉄建公団、県土木部、県農政部、県住宅供給公社の理解と協力により実施されました。今後とも文化財保護にご協力をお願いします。

今回は全国の新聞社の紙面をにぎわした玉名市柳町遺跡の文字資料も登場します。また、遺跡の年代や時代については2ページにまとめています。遺跡の記述は時代順にしており、また、内容をより分かりやすく知っていただくため、それぞれの遺跡の特徴を見出しつけています。

また、遺跡の調査内容一覧と遺跡所在地図を最後に用意しました。ただ、遺跡地図は詳しいものではありません。遺跡を見学されたい方は地元の教育委員会か熊本県文化課までご連絡ください。それではゆっくりご覧ください。



*図上の各時代の時間幅は実際の長さとは比例ではありません。特に旧石器時代と縄文時代は紙面構成上かなり圧縮しました。

縄文時代早期の大遺跡

五木村 頭地田口A遺跡

遺跡は川辺川東岸の村役場背後の丘陵に位置しています。主に縄文時代早期と古墳時代の遺跡がかさなっていました。総面積約9000m²で平成5年度から調査を始めて、平成9年度に終了しました。
(第11号「頭地1遺跡」で紹介しています。)



古墳時代の木棺墓

古墳時代では、木棺墓と思われる遺構と埋葬に関連すると推定される土坑が見つかっており、5世紀後半に一帯が葬地として利用されていたと考えています。

縄文時代は早期を中心に数万点の土器や石器が見つかっており、あまりに大量になりますので現在も整理作業を行っています。鹿児島県など違う文化圏からの土器も持ち込まれています。



縄文時代早期の調査風景

側) の谷奥部の追地とその北側の丘陵の先端部にあります。15~17世紀の墓地部分と17~18世紀の建物部分に位置がわかれます。墓地部分は第13号でお知らせしているので、今回は建物部分について紹介します。



遺跡全景（西から）

建物は、礎石建物1棟、掘立柱建物3棟が見つかっています。

特に注目されるのは、西側の2棟の掘立柱建物で、ゆるやかな斜面の低い部分を石垣でとめて土を入れ、平らに造成して、大きいものは直径1m前後、深さ1.5mの柱穴を掘り、直径25~35cmの柱をすえています。

この2棟の周辺からは、17世紀代の肥前系陶磁器と中国からの輸入陶磁器（景德鎮系、福建系）の割合が高く、どういう目的で建てられたのか興味深いところです。

となりあわせの墳墓と時期が重なることから、寺のような宗教的施設か、当時の有力者の屋敷と考えられます。



2号掘立柱建物の柱跡（北から）

江戸時代初期の有力者の館跡か？寺院跡か？

五木村 頭地松本B遺跡

遺跡は五木村の中心地、頭地地区田口集落の背後（東

縄文のビーナス！土偶、神を祭るシンボル石棒出土！

熊本市 鶴羽田遺跡

住宅供給公社による宅地の造成工事がここで行われることになり、事前の確認調査を行い、造成工事対象地域の内の約4,000m²で発掘本調査が必要となりました。そのため、県と供給公社は契約をかわし、県文化課で本調査を実施しました。



調査区全景（東より）

調査は、平成8年の11月末より開始し、平成9年4月始めに終了しました。

調査では道をはさんで大きく1区と2区に分けました。1区は、調査対象地域の大半を占めるもので、標高約70mほどのゆるやかな丘陵地です。2区は、その北側に位置し、西から入り込む谷地形の内、造成で道路敷となる部分のみです。

1区では、道路状遺構か2、竪穴住居跡が10数軒、住居跡状竪穴3基、焼土坑が3基出土しました。このうち住居跡と住居跡状竪穴は、いずれも縄文時代後期末のものと思われます。

遺構のあり方は場所によりやや違いがあるようで、西側の集中区では、径が4m～5mほどの楕円気味の円形が多く、中央付近の住居跡は、径が4mほどの円形を呈したものが多いためです。SI-14とした竪穴遺構は、1辺が4mのやや平行四辺形に近い方形のものでした。さらに、東の方の2基は径3.5mほどの円形のもので、やや小型でした。

残っている掘り込みの深さはまちまちで、ほとんど無いものから30cmを越えるものまでありました。また、床面として確実に硬化面がみられたのは4軒程度で、他は部分的あるいはほとんどないものでした。柱についても、確認できたものは少なく、本数もまちまちで深さもせいぜい30cmほどでした。炉はあるものと無いものがあり、中には径が80cmを越え



縄文時代後期住居跡

るものもありました。また、遺構の集中するところでは何基も切り合い関係になるものがあり、数回の建て替えも考えられます。

出土した遺物は、網コンテナにして30箱ほどになりました。特に顕著な出土遺物としては、土偶3個体、石棒1本、注口土器1個体などがあります。

土偶のうち、一つは肩の部分から足下まであり、非常に残りがよいものです。胸部には肩からのびた豊かな乳房が表現され、突き出た腹部は妊婦を表現したのでしょうか。また、背面には、肩胛骨をしめすような二つの縱にのびた隆起の装飾があり、その下には健康的な臀部が表現されています。

もう一つの土偶は頭部のみで、SI-14の中から出土しました。顔面は眉もしくは目を表現した細線が描かれ、その下部に中心よりずれた位置に丸い押圧がみられ、口を表現しています。後面には髪を表現した沈線が数条描かれていますが、耳に当たるものは見られません。



土偶

石棒は、SI-14内から出土したもので、床面附近に横に倒れた状態で出土しました。頭部には3条の凹線を巡らし、頭頂に横1条の凹線が入る。下部は斧のような刃部を造り出し、磨製石斧のようにになっています。切先はとがっていませんので、

検出側の少ない 円形周溝遺構を発見

上益城郡益城町 梨木遺跡

日本道路公団が平成11年の「くまもと未来国体」に向けて計画している熊本空港インターチェンジ建設事業に伴い、梨木遺跡の発掘調査を実施しました。今年度は熊本-益城-大津線（第2空港線）の南側と九州自動車道の西側の箇所で、将来的料金徴収所ができる部分の調査でした。



石棒

斧としてそのまま使ったのではないでしょう。

注口土器はSK-09から押しつぶされたような状態ではありましたが、ほぼ全体が出土しました。高さが20cm、幅が15cm、注口部が5cmほどです。胴部に沈線が2条走り、注口部の下部で上に上がっています。



注口土器

2区では、精査したところ、土坑が1基出土しました。一部が調査地にかかっていて、幅2m、深さ1mのもので底部はやや丸みを帯びています。埋土は黒色の粘質土で、部分的に焼土か混じっていました。遺物は一点も含まず、時期はわかりませんでした。

以上のことから考えて、この遺跡は、縄文時代後期末の集落の一角をなすもので、数世代にわたり生活していた場所と思われます。遺跡の本体は本調査区の南西側に広がるものと推定されます。

出土遺物の中には、土偶、石棒、注口土器などの特殊な用途を想定できるものがあり、当時の人々が何かお祭りをしていた名残をとどめているものと思われます。



縄文時代早期集石遺構

調査の結果、縄文時代早期（10000～6000年前）から弥生時代後期頃（1800年くらい前）の遺跡ということがわかりました。

当時の遺構として、調理場の跡と思われる集石遺構が2基、祭祀に利用されたと思われるドーナツ形の円形周溝遺構が2基、中世以降に造られたと思われる大小の溝状遺構が24条とゴミ捨て場の跡と思われる土坑が5基見つかりました。



弥生時代後期円形周溝遺跡

また、出土遺物としては、縄文時代後晩期の土器片、工具として利用されたと思われる磨製石斧、弓矢の矢尻に利用された石鏃などや弥生時代後期の土器片と思われるものが数多く出土しました。

日本最古の文字資料を確認！

-1号木製短甲附属棒状留具の文字-

玉名市 柳町遺跡

熊本県文化課では平成6年度から、国道208号玉名バイパス建設にともない、事前に玉名平野中央の水田の下に埋もれていた柳町遺跡の発掘調査をおこなっています。

遺跡は菊池川にほぼ隣接しており、時代は縄文時代晚期から平安時代初頭の時期です。各時期の土器とともに、これまでに農具や建築材など多種で多様な木の製品や道具（木器）がほぼ完全な形で約1300点ほど出土しています。それは各時代ごとに一つの村の生活の様子を復元できるほどです。

特に弥生時代末～古墳時代前期の柳町遺跡は玉名平野右岸の要衝に位置した「津」と考えられ、菊池川を利用し、有明海から遠く中国大陆や朝鮮半島へと広がる海上交通に関わったと想定される大規模な拠点の集落のようです。

今回の文字発見は、平成7年2月に2号井戸内から出土した1号木製短甲に附属する「棒状留具」の裏面から、国立歴史民俗博物館の永嶋正春助教授による自然科学分析中に偶然発見されました。

この短甲は全国初の後胴と頸肩部が一体となったもので、地域性があり、しかも弥生時代の伝統を受け継いだ木製よろいです。そして棒状留具は短甲の背中中央部に向かって左側に、縦に取り付けられていました。本来は2個で一对を成したものですが、出土は1点のみです。

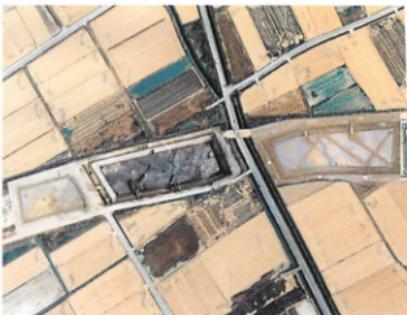
棒状留具は長さ7.8cm、幅1.1cm、厚さ0.9cmで、断面は半円状のかまぼこ形です。文字は裏面の普段は誰にも見えない箇所に書かれていました。

平成9年2月、千葉県佐倉市の国立歴史民俗博物館において専門委員11名で構成された「柳町遺跡出土1号木製短甲の文字に関する検討会議」で、「左端の文字は“田”と読み、まだ確認できない残り四文字分がある」と判断されました。

この時代には「横書きの文章」はありませんが、留具の狭い幅内にほぼ文字を書いていることから、「一字づつの文字」として、横位置にほぼ等間隔で書き、互いの文字は意味としては独立したものではないかとも想定できます。

また、文字の年代は2号井戸より一緒に出土した甕や壺から、4世紀初頭（古墳時代前期）と考えられます。まさに「日本で木製品に楷書の書体で書かれた最初の文字」です。

これまで日本における文字の出現は、弥生時代中期の甕棺内出土鏡や「漢委奴國」金印の例があり、弥生時代人が中国の漢字にふれていたことが推察されます。しかし現在までのところ弥生時代に国内で書かれた文字は確認されていません。



調査区全景



1号木製短甲の裏側（左側に棒状留具が見える）



1号木製短甲の井戸からの出土状況



2号井戸から出土した古墳時代初期の土器

明らかに文字の使用が日本で確認されるのは、千葉県市原市稻荷台1号墳出土「王賜」銘鉄剣等の5世紀中頃の資料が最古といわれています。

田の文字は横7mm、縦5mmと小さく、高拡大顕微鏡による観察や、赤外線写真の分析結果から墨書ではなく、植物などの有機系染料で書かれていたことが奈良国立文化財研究所の調査でわかりました。

この材が古来より神聖な木の一つである「椿」であることや、よろいの構造として必要でないことから、「護符のようなもの」とも想像されます。

また木製短甲がその当時貴重品であり集落首長層の着用と想像されることから、この文字を書いた人がこの地域におり、古墳時代の早い時期から文字を使用していたのでしょうか。

今回の文字の発見はこれまでに文字資料がなかった「空白の時代4世紀」の大きなキーワードとなるとともに、古代玉名の先進性、ひいては吉野ヶ里遺跡などを含む有明海地域に広がった古代文化の素晴らしさを知る契機となりました。

集落を区切る溝を検出！

-平成8年度の調査-

調査区

平成7年度に井戸や土壙がまとまって検出され、しかも2号木製短甲や破鏡、土製模造品、破損農具なども出土した調査Ⅲ区の近接地区が、平成8年度調査Ⅳ区です。この田園の小名は「ふけ：不毛」と呼び、周辺でも最湿地帯所です。

集落の外郭溝

ここから昨年度まで集落が立地していた平坦部と旧河道に向けていたいに下がる場所との境に、集落を囲う様な「布掘り形状」溝2本が検出されました。溝幅は約30cmですが、深さは50cmと深く、その中央部には大型の柱穴2個が轍250cmで並んでいます。溝はその形状から柵列のようなもので、集落部（内郭）とを区分けし、2個の柱穴は門跡で、集落の出入口の構造かもしれません。

流路への堰跡

堰跡と想像される杭列が8列、約120本検出されました。杭列は流路に直行し4回にわたり2列同時に打たれ、杭はいずれも大振りで大型木を縱割りにした材や平板材などで構成されています。

また一部には橋脚かと想定されるような、20cm絶縁で打ち込み深度80cmの丸杭も4カ所で確認されました。

古墳時代の地形

平成6年からこれまでの調査で、玉名平野中央部では至る所に集落が立地する徹高地があり、その地形は変化に富み起伏があり、南北を主軸とした小型河道（流路）が流れています。



短甲の小口に見えるベンガラ



加工した椿の木



堰跡のようす



集落を区切る溝
(右側が集落域)

菊池郡家推定地の近くを発掘

菊池市 深川遺跡

深川遺跡の発掘調査は、植木インター菊池線のバイパス工事に先立っておこなわれました。路線は、深川遺跡・西寺遺跡を通る計画で、路線変更などができないため、事前に記録保存のための発掘調査をおこないました。

調査区の最西端の調査1区は、古代の役所跡と推定される西寺遺跡の土壘の約200m北側に位置します。遺物がほとんど出土しておらず時期ははつきりしません。2×3間の掘立柱建物跡が6棟確認されました。

1区の東側の3区からは、中世の道路（堀切道）が確認されるとともに、奈良時代末～平安時代頃の住居の跡が2棟、みつかりました。



調査1区掘立柱建物群

県下でも最大規模を誇る横穴群を調査

菊池郡七城町 瀬戸口横穴墓群

瀬戸口横穴墓群は、七城町のうてな台地の西側に、250基以上存在する県下でも最大規模の古墳時代の終わり頃の横穴墓群です。その存在は以前から知られており、過去、何度か発掘調査がおこなわれてきました。今回の調査区は、そのほぼ最南端にあたり、県道拡幅工事で削られることとなり、事前に発掘調査を実施しました。

調査した横穴墓は全部で13基ですが、柔らかい凝灰岩の崖面に掘りこまれていることから、玄室の半分以上が崩壊している墓も多く、盗掘されているものもあったようで、正確な時期を決定できる土器類は、ほとんど残っていませんでした。

しかし、それぞれの横穴墓の並び方や、掘り方などから、各横穴墓の築造の順序はある程度、推定で



横穴墓群遠景

きそうです。玄室の中の死体を安置する屍床とよばれる部分に残っていた遺物は、武器である鐵鎌、装身具であるガラス製の小玉、勾玉などのほかに馬具の一部もみつかりました。また、屍床を灯明台のように掘りくぼめたものや、朱で塗った部分なども確認され、興味ある成果があがりました。

国府推定地二本木遺跡群を発掘

熊本市 二本木遺跡群

新幹線船小屋八代間の着工に伴い、熊本駅整備のための工事に先立ち、埋蔵文化財の発掘調査が実施されました。



調査区空中写真

今回の調査区は、二本木遺跡群と呼ばれる遺跡群の中の一部にあたります。出土遺物は、縄文晩期の土器から14C頃の輸入陶磁器までさまざまでしたが、ほとんどが流れ込んできたものでした。当時の遺構としては土坑が数基と溝が5～6条みつかっただけでした。

今回の調査では、二本木遺跡群の広がりを確認する一助になったと考えられます。

重要文化財級！中国越窯 の青磁瓜形水注出土！

鹿本郡植木町 塔の本遺跡

「せんせー、なんか塩ビ管のごたっとが出てきてたよ。」

それは平成8年8月下旬の、残暑が厳しい3時ご



調査区空中写真（東より）



土壙墓内青磁水注の出土状況

ることでした。「塩ビ管」にみえたのは、全国でも珍しい青磁水注の頭（くび）の部分だったのです。真上から見たため丸く、しかも色や大きさがそつくりでした。

「うーん、これは確かによく似ている。」

ふるさと農道建設事業に伴う発掘調査は、平成8年度から着手しており、植木町教育委員会を調査主体として、県文化課職員も調査員として支援してもらっています。今まで、ヲスキ、塔ノ本、今古閣・久保遺跡などを調査しています。

塔ノ本遺跡は菊池川下流に注ぐ木葉川の支流に面する台地上にあります。この台地の中央を「戰跡・田原坂」へ通じる道が通り、古くから玉名地方に通じる道として付近一帯は交通の要衝でした。

調査では平安時代の掘立柱建物を構成すると思われる多数のピットを検出しました。

土壙墓（どこうぼ）

青磁水注が出土した土壙墓は長さ2m、幅80cmの



越州窯青磁瓜（うり）形水注

頬の丸い長方形です。底には木炭があり、頭位は北向きでしょう。青磁水注は北側中央の底部から出土し、須恵器坏が西壁中央から出土して年代の決め手になりました。

青磁水注（せいじすいちゅう）

青磁水注は残存高21.0cm、胴径13.3cmで、口縁部、把手、注口を欠きますが、優美な瓜形の胴部は完形です。外外面にくすんだ緑青褐色の釉がかかり、4箇所の瓜割の部分は他の部分より緑味が強い色調をしています。産地は中国浙江省の越州窯と考えられます。

この時期の日本国内出土の数少ない水注のなかでも五指に入る優品です。他の例が出土状況など不明瞭であるのに比べて、正式な発掘調査によるものであり、しかも共伴の須恵器坏から9世紀後半から10世紀前半ころの時期が考えられます。この点は水注自体の価値にもまして非常に重要なことです。

なぜ、ここにこんなものが

本遺跡周辺ではいろんな貴重なものが出土しております。付近一帯が平安時代をつうじて県下でもかなり有力な地域であったことを知ることができます。こうした高価な品をもっていた土壙墓の主の存在は山本郡の繁榮を物語るものであり、「駄の原長者」伝説を思い起こさせてくれます。

県内初の托上椀や金銅製品などを副葬した重要人物の木棺墓発見！

鹿本郡植木町 ヲスギ遺跡

ヲスギ遺跡は旧石器時代から近世にいたる複合遺跡です。木葉川の東、標高85mの大規模な台地上にあり、木棺墓は調査地第5区としている地点にあります。



調査区空中写真



木棺墓内遺物出土状況

今回は遺跡でも特に注目される遺構である木棺墓（お墓）について取り上げます。

形態は南北に細長い楕円形で、北側がやや幅広となり、長さ2.1m、幅80cm、深さ50cmです。

出土遺物には土器類「托上椀（たくじょううわん）」

1点、黒色土器B類1点、土師器高台付环1点、土師器小皿4点)、鉄製品「手斧（ちょうな）」1点、火打鉄（ひうちかゆ）1点)、その他（金銅製品・炭・骨片）がありました。

この木棺墓の時代は出土土器から10世紀末～11世紀始め（平安時代の中頃）にかけてのようです。

托上椀とは、高台の付いた皿（托）と椀が合体した大変珍しい形です。托上椀の出土する地域は、福岡・佐賀県など北部九州に集中しています。

今回の発見でその南限が植木町ということになり



木棺墓内出土遺物

ました。そして、熊本県内では、初めての出土です。北部九州においても特に多いという訳ではありません。托上椀は、宗教に関連する遺跡などで出土することが多いのですが、お墓から出土することは大変珍しいことです。

火打鉄は、火打ち石とセットで用いる火を起こす道具で、県内では数例目です。平安時代までさかのほる大変古いもので、これもお墓から出土したのは県内で初めてです。火打鉄に用いられる鉄は良質でなければならず、当時の高級鉄といえます。

金銅製品は、薄い銅板をたたき延ばして製作したもので、大変薄いものです。長辺には、筒状で、片面には金メッキされており、中央部には、2つの穴があります。この製品が、何の部分かはつきりしないのが残念ですが、非常に薄く仕上げ、金の色調も袁えず、最高級品の一部には間違いないようです。

平安時代にこのような品物のあるところといえば宗教関連施設ではないかと考えられるところから、仏教で用いられる道具（仏具）の一部の可能性があります。具体的には仏堂をかぎる莊嚴具の一部である華鬘（けまん）の吊り金具の部分、あるいは筒状の部分に棒をとおして、ちょうどかいでしての機能を持たせ、曼陀羅（持ち運び用）・幡あるいは木箱のようなものを閉開できるようにとめていたものなどが考えられます。

いずれにしてもこれらの貴重品を持ち得る人とは宗教にも深い関わりを持つ地元の最有力者の一人であったことがうかがえます。近接する塔ノ本遺跡では、平安時代前期の中国越州窯青磁の水注がほぼ完形で出土しており、このあたりが特別の地域だったことがわかります。

現在の植木町は、859年（貞觀元年）＝平安時代に分立した山本郡にほぼ相当するといわれています。もともと合志郡の一部であった現在の植木町が九州で唯一郡の独立を果たせた背景には、人口の増加・年産基盤の拡大とともに、三ノ岳北側に存在する製鉄遺跡群の経営や木葉川を利用した貿易の可能性があるようです。

藏城の性格をほぼ解明

球磨郡錦町 藏城跡



藏城と岩城（木枝城）の周辺

藏城遺跡は球磨川右岸の東西に長い独立丘陵上にあります。「藏城」という字は、相良氏の米蔵があつたとの伝承に由来しています。その伝承の真偽は古文書にも登場しないことから定かではありませんが、昔から中世の城跡として知られてきました。

平成3年の錦町教育委員会による本格的な発掘調査により丘陵東側の高台から掘立柱建物跡3棟と土壙跡が発見され、中世の城跡であることが確認されました。ただし、残念なことに東側の高台は大部分削られており、そのすべてを知ることはできません。

今回の調査は東側高台を除いた西側の部分の調査で、平成7年度に引き続き調査を行っています。

現在までの成果は、丘陵西側の高台に掘立柱建物跡（2間×4間）1棟、それに伴う柵跡が東西、南北方向にそれぞれ1列が見つかっています。そこから西方面を一望できることから見張り小屋のようなものだったと思われます。また、その高台の東側際に北方向、南方向に延びる堀跡がそれぞれ1条、そ



調査区全景（東より）

れらより東側に北側から緩やかな傾斜をもち直角に屈曲しながら東側高台に向かっている堀跡が1条見つかっています。それら遺構に伴い、青磁器、南宋銭などの中国からの舶載品や土師碗、すり鉢などの日用雑器、漁に使う土錘など、中世の遺物も多数見つかっています。

「藏城」周辺の環境を見てみると、南東の方角で「藏城」からあまり離れていない場所に「岩城」という字の独立丘陵があります。ここは文献にみる「木枝城」の推定地とされているところです。また、二つの丘陵の間には、武家屋敷群を思わせるような「覚井」という字が残っています。ここには「木枝城」の城主の家臣団の居住地があつたものと思われます。また、昔の鳴道で、西から「藏城」丘陵の北壁を通り、「覚井」を抜けて、「岩城」丘陵の北側を通り東に抜ける道がありますが、この道ぎわには天文3年（1534）銘の庚申塔があることから古くから利用されていたことがわかっています。

このような周辺の環境から、「藏城」には「木枝城」の出城（じご）としての機能を想定してよいのではないかと考えています。

掲載遺跡調査内容一覧

No.	遺跡名	所在地	調査面積	事業名	調査期間	時代	調査者
1	頭地田口A	球磨郡五木村	9000m ²	建設省川辺川ダム	H8.4-H9.3	縄文早・古墳	山城
2	頭地松本B	球磨郡五木村	4000m ²	建設省川辺川ダム	H8.4-H9.3	江戸	山城
3	鶴羽田	熊本市櫛尾町鶴の原	4000m ²	住宅供給公社	H8.11-H9.4	縄文後・晩	坂田
4	梨木	上益城郡益城町広崎	7500m ²	日本道路公團	H8.4-H9.3	縄文後晩・弥生前	野田
5	柳町	玉名市河崎	3000m ²	建設省玉名バイパス	H8.4-H9.3	弥生後・古墳前	高谷・池本
6	深川	菊池市西寺	4000m ²	県道バイパス	H8.6-H9.10	奈良・平安・中世	帆足
7	瀬戸口横穴群	菊池市七城町瀬戸口	500m ²	県道拡幅	H8.9	古墳後	帆足
8	二木本	熊本市田崎1丁目	700m ²	鉄建公團熊本駅整備	H9.2-3	中世	帆足
9	藏城	球磨郡錦町木上	4000m ²	急傾斜地崩壊対策	H8.4-H9.3	中世	矢野
18	ヲスギ	鹿本郡植木町	700m ²	ふるさと農道	H8.9-H9.3	平安	中原・木村
19	塔ノ本	鹿本郡植木町	700m ²	ふるさと農道	H8.4-H9.10	平安	中原



文化財通信くまもと 第14号

平成10年3月31日 発行

発行 熊本県教育庁文化課

熊本県水前寺6丁目18番1号

☎096-383-1111 (内線6716)

印刷 敷島印刷株式会社